

慶大・正吾初先発も3打席凡退

法大・吉鶴「抑えたいと」

<東京6大学野球フレッシュトーナメント：法大11-3慶大>
◇決勝戦◇3日◇神宮

決勝戦慶大対法大 初スタメンで出場する慶大・清原の名前が表示されたスコアボード(いずれも撮影・柴田隆二)

3回表慶大2死満塁、清原は遊ゴロに倒れる



清原は遊ゴロに倒れ 悔しそうにベンチに戻る

西武、巨人、オリックスで通算525本塁打を放った清原和博氏(53)の長男、慶大・清原正吾内野手(1年=慶応)が法大との決勝戦で公式戦初のスタメン出場を果たした。「7番指名打者」でフル出場。1四球は選んだが、3打席凡退を喫した。チームも8回コールド負け。ほろ苦い結果となったが、好機で食らいつく姿勢を見せた。法大は16年秋以来35度目の新人戦優勝。3・4位決定戦は、明大が早大に勝利した。

8回コールド負けで、スタンドに一礼する慶大・清原(中央)

勝ち越し機に、神宮の熱気が高まった。慶大は2点を追う3回、押し出し死球と適時内野安打で追い付き、なお2死満塁。清原に第2打席が回ってきた。マウンドには、法大・吉鶴翔瑛投手(1年=木更津総合)。ソフトバンク吉鶴バッテリーコーチを父に持つ左腕は、変化球中心に攻めてきた。ファウル2つでしのぐ。カウント2-2からの6球目、高め135キロを打つも、遊ゴロに倒れた。

2回の第1打席はストレートで四球。第3、4打席は走者なしで回り、6回は変化球に空振り三振。8回は外の直球に見逃し三振。一塁側ベンチ上では、この日も父和博氏が見守った。快音は届けられなかった。だが、爪痕は残した。吉鶴は「慶大の打者はしぶとさがある、決め球を簡単に振ってくれない。投げづらさはありませんでした」。清原のことは、もちろん知っていた。「ニュースで見ました。抑えたいと思いました」と明かした。

全3試合中、2試合に出場した。計5打席で4打数無安打2三振。結果は出せなかったが、小6以来となる野球を初の硬球で再スタートし、チームに合流したのは、この春。そんな選手が、新人戦とはいえ、公式戦で神宮に立ったこと自体が類を見ない。4回に一時勝ち越しソロを放った水鳥遥



貴内野手（1年＝慶応）は、高校も同じ清原について「練習熱心。背が同じぐらいなので、体の使い方など一緒に話しています。毎日、頑張ってますよ」と証言した。次はリーグ戦の舞台で。多くの人に、そう思わせた。【古川真弥】

監督評価「落ち着いていた」

2021年6月3日6時0分

慶大・清原正吾が神宮デビュー



＜東京6大学野球フレッシュトーナメント：慶大2-0東大＞◇Bブロック第3日◇2日◇神宮

7回裏慶大1死、右飛に倒れた清原(いずれも撮影・足立雅史)

7回裏、打席へ向かう清原のバットに「中田翔」の文字

神宮初打席は右飛だった。西武、巨人、オリックスで通算525本塁打を放った清原和博氏(53)の長男、慶大・清原正吾内野手(1年＝慶応)が東大戦の7回に代打に立った。公式戦初打席は凡退したが、登場に球場が沸いた。慶大はBブロックを2連勝で通過。3日にAブロック1位の法大と決勝戦を行う。

試合を終え、スタンドから拍手を送る清原氏

◇ ◇ ◇

ヘルメットをかぶった清原が一塁側ベンチから姿を現すと、ファンの拍手が起きた。1-0の7回1死走者なし。指名打者の渡辺大に代わりコールされる。ベンチ上あたりの席に座る父は、両手を組んで静かに見守っていた。東大の左腕・小島に対し、3球続けて見逃した。ボール、ストライク、ボールからの4球目。外寄り119キロを打ちにいった。右中間へ上げたが、右翼の守備範囲内だった。

「一発で仕留めることができず、悔しいです。次のチャンスに向けて、しっかりと準備したいです」

1、2年生限定の大会とはいえ、公式戦初出場。その初打席で凡退し、チームを通じたコメントに心中をにじませた。ただ、ネット裏で視察した堀井監督は「内容は良かったと思います。芯近くで打っていた。もう少し打球が低ければ、右中間に抜けていたでしょう。何より、落ち着いていたのがいい」と、ボール球に手を出さず、しっかりスイングする姿勢を評価した。

本格的に野球をやるのは小6以来。学生野球トップレベルの東京6大学で、初の硬式野球に挑戦している。長打を秘めた打撃を買われ、Bチームの練習試合でベンチ入りした時のこと。blankがあるのにと、起用をいぶかる声もあったという。だが、フェンス直撃打を放ち、雑音は消えた。Bチームの紅白戦では2戦連続で本塁打も放った。

真摯(しんし)に野球に取り組む。本来は外野だが、少年野球とは格段にレベルが違う。野手の動きを学ぶため、あえて内野手登録。一塁手として勉強の毎日だ。練習試合ではベンチにノートを持ち込み、分からないプレーがあれば周りに確認し書き留めている。



堀井監督は「紅白戦、オープン戦、フレッシュ、リーグ戦と段階がありますが、順調に踏んでいる」と目を細めた。まずは、法大との決勝で、新人戦春の王者を目指す。【古川真弥】

◆清原正吾（きよはら・しょうご）2002年（平14）8月23日生まれ。東京都出身。小3からオール麻布で野球を始める。中学はバレーボール、慶応高ではアメフト。21年に慶大商学部入学。内野手（一塁手）。尊敬する人は両親。186センチ、90キロ。右投げ右打ち。

日刊スポーツ 慶大・清原正吾 2021年5月31日 18時11分

「自分はバッティングが長所」 父清原和博氏のサポートで挑む



慶大対早大 試合中、ベンチでタイミングを取りながら素振りする慶大・清原(右)(いずれも撮影・浅見桂子)
9回表慶大の攻撃中、ベンチでヘルメットをかぶる慶大・清原(奥)

＜東京6大学野球フレッシュトーナメント：慶大1-0早大＞◇Bブロック第1日◇31日◇神宮

西武、巨人、オリックスで通算525本塁打を放った清原和博氏(53)の長男、慶大・清原正吾内野手(1年=慶応)がベンチ入りした。



父と母亜希さん(52)も観戦に訪れる中、出場機会はなかったが、出場選手のサポート役をこなした。中学、高校は野球を離れたが、学生球界トップレベルで野球を再スタート。チャレンジ精神で、リーグ戦デビューを目指している。

仲間と喜びを分かち合った。清原は「神宮の舞台は特別だと思いました」と澄んだ目で言った。1、2年生だけで行うフレッシュトーナメント。初戦で宿敵・早大を1-0で倒した。前日のリーグ戦最終戦で、慶大は早大に敗れていた。「絶対、早稲田に勝ってくれ」とAチームのメンバーから託され、代打に備えた。出番こそなかったが、勝利の味を共有した。

小3から少年野球を始めたが、中学はバレーボール、高校はアメフトに進んだ。転機は3年の時、コロナで部活動が休止になったこと。「弟、おやじ、家族全員で野球の練習を始めて、野球が好きだなと思いました。両親に、大学で挑戦すると伝えました」。本格的にバットを握るのは小6以来。

しかも、硬球は初めて。最初は打撃の詰まりにてこずったが「おやじはバッティングに悩んでいる時、優しく教えてくれる。自慢のおやじです」と心強いサポートがある。

試合前、キャッチボールする慶大・清原

既にBチームのオープン戦に出場。身長186センチ、体重90キロの恵まれた体格からかつ飛ばし、首脳陣を驚かせている。「今の目標は、神宮で打席に立って思いきりフルスイングすることです。自分はバッティングが長所。おやじのような選手になりたい」。フレッシュから、その先のリーグ戦デビューへ。パワフルな打撃で挑む。【古川真弥】

慶大ベンチに向かって手を振る清原和博氏



(C)2020, Nikkan Sports News. nikkansports.comに掲載の記事・写真・カット等の転載を禁じます。すべての著作権は日刊スポーツ新聞社に帰属します。(黄色地紋：林 莊祐)